



“モンゴルから見た日本、アジア”

教授 大野 旭(楊 海英)(文化人類学)

1964年生まれ、1994年国立総合研究大学院大学博士課程修了、文化人類学専攻。1995年関西外国語大学講師、1997年中京女子大学助教授、1999年静岡大学人文学部助教授、2006年から同教授、現在に至る

研究概要

私が取り組んでいる研究課題は、モンゴルの近現代史を世界史と国際関係の中で再構成することです。モンゴル人は20世紀に複数の国に分断されて住むようになりました。そのため、現在までに書かれたモンゴルの歴史にも、それぞれの国家の政治的な影響が色濃く反映されています。私は歴史の当事者たちの「語り・認識」と各国政府の公文書を中心に、モンゴル人の生き方を重視した歴史を書きあげようと努力してきました。現在は主としてモンゴルと日本との関係に注目しています。満洲国時代に形成されたモンゴルと日本との良好な関係、そしてその良好な関係が中国によって否定され、モンゴル人が大量虐殺された歴史の真相解明に取り組んでいます。文化大革命中の「モンゴル人大量虐殺運動」です。著書『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(岩波書店、2009年、「第十四回司馬遼太郎賞」を受賞)は、日本的な近代教育を受けたモンゴル人(右写真)が中国によって大量粛清された歴史をとりあげています。



メッセージ

さきの日清戦争のとき、モンゴル人たちは日本人とともに、大国ロシアに戦いを挑み、勝ちました。日本はアジアでもっとも早くから近代化を実現させ、弱小民族に希望をもたらしたから、日本を選んだわけです。その後、満洲国時代においても、モンゴル人と日本人は共に完全に新しい国家を建設しようとしたのですが、頓挫しました。歴史は「生き物」です。殖民地史についても、ひたすら負の側面だけに注目して、批判まがいの研究のみでは真実は見えてきません。たとえば、「モンゴル人から見た五族協和の満洲帝国」というのも面白いジャンルではないか、と認識しています。私は文化人類学者で、学問のベースはフィールドワークにあります。現場から得られた最新の知見を歴史学研究に持ちこみ、近現代史を書きなおしていきたいと考えています。

【主な研究業績】

受賞歴：第十四回司馬遼太郎賞(2010)

外部資金獲得状況：科学研究費補助金①「近現代におけるモンゴル系諸集団とイスラームの関係について」(基盤B、海外学術調査、2003-2005、研究代表)②「モンゴル族から見た中国文化大革命の実証研究」(基盤C、2007-2008、研究代表)③「中国・モンゴル族が経験した文化大革命の実証研究」(平和中島財団・国際共同研究、2007、研究代表)④「社会主義中国におけるエスニック・ジェノサイドに関する実証研究」(基盤C、2010-2012年度、研究代表)

委員等：日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(2008~2011)

学会等：国際シンポジウム「シルクロード草原の道におけるアルジャイ石窟の歴史と文化」開催(2007)

著書・論文：

- 1) 『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(岩波書店、2009、上下巻)
- 2) 『モンゴルとイスラーム的中国—民族形成をたどる歴史人類学紀行』(風響社、2007)
- 3) 『モンゴル草原の文人たち—手写本が語る民族誌』(平凡社、2005)